

感じられたものの、発表終了後の質疑では活発な議論が繰り広げられ、画像処理やモデリングを研究している研究者の方々の熱気と意気込みがひしひしと感じられた。

なお、大会のプログラムについては下記のアドレスに記載されているので、参照されたい。

<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/iieej/trans/2001nenjipro.htm>

## ◆ 3次元画像コンファレンス 2001

阪本邦夫

秋田県立大学

(Newsletter Vol. 6, No. 7 より転載)

3次元画像コンファレンス2001が7月4日(水)、5日(木)の両日、工学院大学において開催された。本コンファレンスは3次元画像に関連する学会・研究会の共催で、3次元画像の入力・表示・処理・通信や立体視などに関わる研究発表・討論の場として毎年この時期に開かれている。発表件数は、特別講演1件、特別企画3件、招待講演3件のほか、一般講演として32件の口頭発表、9件のポスター発表とほぼ例年どおりの開催規模であった。

第1日目のホログラフィのセッションでは、計算機合成ホログラムに関する発表4件と、湘南工科大の佐藤甲癸先生により「ホログラフィ技術の最近の展望について」と題して、動画ホログラフィ研究の動向を中心に、ホログラフィの可能性についての講演が行われた。VR・システムのセッションでは6件の一般講演のほか、「VR技術の産業応用」という特別企画において、「マルチメディア・バーチャル・ラボ」、「全方向ステレオカメラシステム」など3件のVR技術が紹介された。医用および生成

アルゴリズムのセッションでは、8件の一般講演が行われ、医用画像の立体表示技術を用いた可視化など医療での応用や3次元物体のモデリング技術などが紹介された。

第2日目は立体画像を用いた認識技術に関する3件の講演で午前中のセッションが始まり、続いて立体視・ステレオ画像のセッションでは、ステレオ画像の視差評価、実時間の視差画像の補間生成システムなど3件の一般講演が行われた。また、「立体視における垂直両眼視差の役割」と題した東工大の金子寛彦先生の講演では、立体画像提示システム等に臨場感を持たせた表示を行う場合には垂直両眼視差による奥行き知覚が重要になってくるのではないかと、今後の立体知覚に関する研究の必要性について述べられた。午後のセッションでは、NHKの下田茂氏より「デジタル放送時代のコンテンツ制作」と題して、製作現場でのデジタル技術を駆使した番組制作や技術開発での苦労話などをビデオを交えて紹介された。

最後のディスプレイのセッションでは8件の一般講演のほか、MRシステム研究所の田村秀行氏が「複合現実感～仮想と現実の融合はどこまで進んだか／これからどうなるのか」と題して、4年余り行われた“Mixed Reality”プロジェクトの研究成果について講演された。

今回も9件のポスター発表があり、ホログラフィ関連が4件、ディスプレイ装置に関係するもの4件などで、今年はデモ機等の持ち込みがなくポスターのみの発表であった。

また、本コンファレンスでは3次元画像機器展が併催されており毎年10社程度の出展があるが、今年はパララックスバリア方式の立体ディスプレイとSPIDAR(力覚提示可能な3次元マウスのようなもの)とを組み合わせた「触れる立体ビジョン」という三洋電機の出展1件のみであった。